九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

漂流民ゴンザのアクセント(上)

坂口, 至
宮崎大学講師

https://doi.org/10.15017/10488

出版情報：文獻探究. 13, pp.1-9, 1983-12-25. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

漂流民ゴンザのアクセント(上)

坂口至

はじめに

『漂流民の言語』(吉川弘文館, 1965)その他において、村山七郎氏により紹介された、薩摩漂流民ゴンザ(1717?～1739)の言語は、18世紀前半の薩隅方言を知る上で、貴重な資料となっている。特に、原文にロシア文字という音素文字が用いられている点で、音韻資料としての価値が高く、村山氏を始め、柴田武・大津不二也・田尻英三の各氏により、研究が進められている【注1】。

ところで、このゴンザの言語には、ロシア語のアクセント符号と同種の符号(´,`)が豊富に付されている。この符号が、いかなる性格のものであるかについては、柴田武氏の、アクセント符号と認めた上での、次のような言及がある。(便宜的に箇条書きにして引用する)

(1)ある点は教示的である。たとえば、fáṇa「鼻」、faṇà「花」(P.47)は正しいアクセントを反映している。

(2)しかしP.98のfaṇàwo(223.)「花を」は正しいアクセントを示していない。(正しくはfaṇawó)。

(3)また、fàdag'「ルバーシカ」。fadág'「下着」のように、同一語に別のアクセントがついている。

(4)また、dzógaija「両替店」(P.46)のように、薩摩方言として考えられない位置にアクセントが来ているものもある。【注2】

かくして、柴田氏は、「一般的には、この資料のアクセントは当てにならないものと考えられる」と結論づけておられるのである。

しかしながら、筆者の考えるところでは、柴田氏の上のような例証の仕方には問題がある。(1)(2)(4)からして、柴田氏が、「正しいアクセント」なるものを、現代鹿児島主流アクセント【注3】と考えておられることは明らかであるが、これは、ゴンザの言語が、今から200年以上も前のものであることを無視した考えである。ゴンザの時代のアクセントが、現代のそれと同じであったということは、まだ証明されていない事柄に属するのであって、現代語のアクセントに拠って、ゴンザのアクセントの当否を直接批評するのは、正しい態度とは言えないのである。

この種のアクセントを扱う際の、踏むべき手続きは、次のようであると考えられる。

イ.用例を帰納的に処理して、アクセント体系を再構できるか否かを検討する。その際、既知のアクセント体系を利用することが必要である。

ロ.アクセント体系が再構できない場合、または、再構できてもそれが不自然な体系であった場合には、そのアクセントは信用できないものと考える。

ハ.存在可能なアクセント体系が再構できた場合、さらに、それが現代アクセントの体系へ無理なく移行できるかどうかを検討し、可能な場合には、過去に実在したアクセントと認めることができる。

筆者は、上の手続きに従って、ゴンザの資料のアクセント符号を検討してみた結果、柴田氏のものとは反対の、≪この資料のアクセントは、大筋において信用できる≫という結論に

達した。以下に、その手続きの実際を示してみたいと思う。

【注1】柴田武「書評・村山七郎著『漂流民の言語』」(国語学68, 1967), 大津有一也「薩摩方言の史的研究」(宇部短期大学学術報告9, 1973), 田尻英三「18世紀前半の薩隅方言」(鹿児島大学教育学部研究紀要32, 1981)

【注2】【注1】柴田氏書評参照。なお、引用文中のローマ字表記については、村山氏『漂流民の言語』の「ロシア字転写の原則」(VII～VIIIページ)参照のこと。

【注3】鹿児島市を代表とするアクセントで、具体的なことは後述。「主流」ということばは、金田一春彦氏のものをお借りした(同氏『日本の方言』(教育出版, 1975) 27～48ページ)。

1

ゴンザの言語資料のうち、今日までに村山氏によって紹介されているのは次の四つである。

『露日語彙集』(以下『露日』と略称)	1736年
『日本語会話入門』(以下『会話』と略称)	1736年
『簡略日本文法』(以下『文法』と略称)	1738年
『新スラブ日本語辞典』(以下『スラブ』と略称)	1736～1738年

このうち、『露日』・『会話』は『漂流民の言語』に、『文法』は『文学研究』(九州大学)66輯(1969)にそれぞれ全文が、『スラブ』は『文学研究』68輯(1971)にその一部が訳出されている。

そして、そのいずれもにアクセント符号が付されているが、『文法』・『スラブ』のものは断片的である。ここでは、『露日』・『会話』を中心に扱うこととする。

まず、『露日』には、全部で1233項目の語句(大部分は単語)が記載されているが、そのうち、アクセント符号がついているものは1035項目で、全体の84%にのぼる。また、『会話』は、序文をのぞくと、619項目の短文(語句もかなり混じる)から成っているが、そのうち572項目(92%)に、何らかの形でアクセント符号が付されている。

このアクセント符号のつけられ方には、次のような特徴がある。

(1)母音字母の上にのみ付される。

例、ábra(油)、cnò(角)、fíbo(紐)

(2)単語、または分かち書きにされた語句(文節であることが多い)のそれぞれに、原則として一つ付される。

例、jokà amázakě(良いビール)、kawága nagajúr(川が流れる)

上の特徴の意味を考えるときに、参考になるのは、ロシア語のアクセントの特徴であろう。筆者は、ロシア語の知識を全く欠いているので、信頼すべき記述【注1】を借用して示すと、次のようである。

(1)強さアクセントを持つ。

(2)原則として、一つの単語には、強アクセントの音節が一か所あり、アクセント符号は、表示される場合には、母音字母の上に付される。

(3)アクセントの位置は、単語によって定まっている。

言うまでもなく、日本語のアクセントは、ロシア語のそれとは違って、高さアクセントである。しかし、多くの場合、音の高低と強弱は平行的であるということも、よく知られている事実である。また、日本語のアクセントは、多くの方言で、一つのアクセント単位の中に、

最低一つの高く発音される音節をもっている。さらに、アクセントが単語ごとに定まっていることも、ロシア語に似ている。

以上のことを考えあわせると、ゴンザは、彼の著作を完成させる過程で、自ら、または協力者のボグダーノフの助言によって、彼の母語のアクセントとロシア語のアクセントとの間に、上記のような類似した性格があることに気づき、ロシア語のアクセント符号を、彼の母語に適用したのではないか、と推測されるのである。もしそうであるならば、

≪ゴンザの言語資料に見られる、ロシア語のアクセント符号と同種の符号は、彼の母語である日本語のある方言における、高さアクセントの高く発音される音節を表示する≫

と考えて、さしつかえないであろう。

ただ、注意すべきは、この種のアクセント符号は、日本語のアクセントを完全には表示できないということである。日本語の方言の中には、一つのアクセント単位の中に、高く発音される音節を二つ以上もつものが多い。ゴンザのアクセント符号では、もしそういう場合があれば、そのうちの一つを表示できるにとどまる。従って、≪ゴンザのアクセント符号は、高く発音される音節を表示するが、それが付されていない音節は、高く発音するのか低く発音するのか、そのままではわからない≫と考えるべきである。アクセント符号の付されていない音節の高低は、別の方法で推定しなければならない。

ところで、ゴンザのアクセントを再構するに先立って、今一つ明らかにしておかなければならないことがある。それは、ゴンザのアクセントが、どこの方言のものかということである。『漂流民の言語』の村山氏の解説や、前出柴田氏、田尻氏の音韻の面からの研究によっても、現代の薩隅方言区域内のどこかであろうということは、ほぼ間違いないと思われるがそれ以上の限定は困難のようである。この区域内には、アクセントの面からいうと、いわゆる西南九州二型アクセントの地域が、最も広く分布している。そして、その中でも鹿児島市を代表とする、鹿児島県主流アクセントの地域が一番広い。ゴンザの出身地も、この地域のどこかである蓋然性が最も高いであろう。よって、ゴンザの出身地を、ひとまず≪現代鹿児島主流アクセントの行なわれる地域のどこか≫と仮定して、話を進めたいと思う。

【注1】市河三喜・高津春繁共編『世界言語概説 上巻』(研究社、1952)、『ブリタニカ国際大百科辞典』(1975)など。

― 2 ―

まず初めに、現代の各方言の間で、型の対応が鮮明であり、調査もゆきとどいていて、比較が容易な、二音節名詞から見てゆきたい。

ゴンザの資料では、二音節名詞に対して、アクセント符号が第一音節に付されるか、第二音節に付されるか、あるいは全く付されないかのいずれかである。アクセント符号を(´, ˋ)各音節を○であらわすと、○̀○、○○́、○○の三つの型があることになる【注1】。これを、前節後半でふれた点に注意して、一般的なアクセント表記に直せば、音声学的には、

○̀○ ～ ○̄○ または ○̄○̄
○○́ ～ ○○̄ または ○̄○̄
○○ ～ ○○ または ○̄○̄ または ○̄○ または ○○̄ 【注2】

という形が、一応は可能である。しかし、このままでは、実際の型は決定できないから、既に知られているアクセント体系と比較してみる必要がある。二音節名詞の場合、いわゆる第

一類～五類という体系分類が、有効であることは言うまでもないが、ゴンザの資料には、一～五類所属の決定困難な和語とともに、漢語もかなり含まれている。これらのアクセントの当否をも調べるためには、現代鹿児島主流アクセントと比較するのが都合がよい。

よく知られているように、鹿児島市を代表とする、現代鹿児島主流アクセントは、比較的単純な調値体系をもっている。平山輝男氏によれば、二音節名詞単独形のアクセントは、丁寧な発音において、

A型 ～ $\overline{\text{○}}$○型（第一～五類分類における一、二類）

B型 ～ ○$\overline{\text{○}}$型（　　同　上　　三、四、五類）

の二種類しかない【注3】。これを、ゴンザのアクセント符号と比較してみよう。なお、現代鹿児島アクセントは、以下すべて、平山輝男氏編『全国アクセント辞典』（東京堂、1960）によることとする。

『露日』

ó○型 ～ 毬(ígě)【注4】石(íʃ)上(úje$_2$)【注5】魚(íwo$_2$)牛(úʃ$_2$)枝(jéda)啞(íʃ)叔父(ódʒ')顔(káwo)柿(kák'$_2$)垣(kák')瘡(kása)舵(kádʒ')風(káʒe$_8$)黴(káb')蕪(káb)壁(kábě)釜(káma)殻(kára)川(káwa)霧(kír')釘(kúg'$_2$)国(kún'$_3$)首(kúb')輿(kóʃ')此(kói)先(sák')酒(sákě$_2$)皿(sára$_2$)皺(ʃíwa)鋤(súk')錫(súz)袖(sódʒe)鷹(táka)爪(cúmě)露(cúr̥̥')寺(téra)十(tówo)鳥(tói)梨(náʃ)夏(nác$_2$)橋(fáʃ$_2$)旗(fáta)蜂(fáč)鼻(fána$_2$)羽(fáně)腫れ(fáje$_2$)髭(fígě$_2$)紐(fíbo)昼(fír)冬(fúi)臍(féso)星(fóʃ)水(míc, mízd̥̥)溝(mízo)道(míč'$_2$)鞭(búč')胸(múně)棟(múně)樅(móm')雪(júk')；一(íč')棺(gán)騎馬(kíba)客(kják$_2$)金(kín)銀(gín)三(sann)七(ʃíč')八(fáč')半(fánn$_2$)晩(bánn)六(lók)＝＝以上【A型】

秋(ák')足(áʃ)網(ám')息(ík'$_4$)何時(íc)犬(ínn)渦(údz)海(úm'$_2$)帯(ób')鍵(kag')樫(káʃ)神(kám')櫛(kúʃ)靴(kúc)芥子(kéʃ)塵芥(góm')匙(sáʒ')錆(sáb')猿(sár)筋(súdʒ)種(táně$_2$)月(cúk')年(tóʃ$_2$)波(nám')後(nóč')原(fár)針(fái)春(fár)触れ(fúre)骨(fóně)堀(fór')孫(mágo)松(mác)耳(mím')山羊(jág')指(íb'$_4$)；袈裟(késa)千(ʃénn)痰(tánn)毒(dók)二度(nído)鉢(fáč'$_3$)櫃(fíc)別(běči)蜜(míc)門(món)＝＝以上【B型】

○ò型 ～ 北(ktà)肝(kimò)鮭(ʃakè)下(ʃtà)砂(snà)爪(cmè)艫(tomò)虎(torà)髭(fgè)人(ftò)鱶(fkà)蓋(ftà)桃(momò)屋根(janè)＝＝以上【A型】

朝(asà)汗(aʃè)粟(awà)泡(awà)糸(itò)疾(ibò)嘘(usò)馬(mmà)桶(okè)笠(kasà)肩(katà)角(kadò)鎌(kamà)鴨(kamò)皮(kawa$_3$)杵(kinè)草(ksà$_3$)熊(kmà)雲(kmò)塩(ʃiwò)舌(ʃtà)島(ʃmà$_2$)霜(ʃmò)脛(snè)外(sotò)乳(čičì)杖(c-jè)網(cnà)角(cnò)中(nakà)納屋(najà)猫(někò)喉(nodò)鳩(fatò)花(fanà$_2$)浜(famà)腹(farà)鮒(fnà)船(fnè$_3$)窓(madò)豆(mamè)婿(mukò)山(jamà)夢(jumè)綿(watà)腸(watà$_2$)；下女(geʒò)後家(gokè)馬場(babà$_2$)＝＝以上【B型】

○○型 ～ 上(uje)内(uč')俺(oi)国(kun')誰(dai)塵(čir')蓋(fta)星(foʃ)水(mic$_4$)道(mič')雪(juk'$_2$)；菓子(kwaʃ)半(fann)百(fjak)＝＝以上【A型】

足(aʃ)泡(awa)池(ikě)臼(us)桶(okě)上(kam'$_2$)皮(kawa)錆(sab')乳(čiči$_2$)月(cuk')時(tok')蚤(nom')端(faʃ)腹(fara)人(fto)節(fuʃ)蛇(fju̥̥b')飯(měʃ)弓(jum')夜(jor$_2$)；医者(iʃa)＝＝以上【B型】

(5)

『会話』

ó○型～ 上(úje)魚(íwo)内(úč, úči₂)枝(jéda)俺(óre₂, ói₂)啞(íʃ)顔(káwo₂)風(káʒe)金(káně₂)壁(káběʒ)釜(káma)紙(kámi₂)川(káwa)口(kúč)国(kúni)首(kúb')皺(ʃíwa)鷹(táka)壺(cúbo)寺(téra)十(tówo)虎(tóra)梨(náʃ)橋(fáʃ')旗(fáta)鼻(fána)水(mídz)道(míci)桃(mímo)＝以上〈A型〉

糸(íto)靴(kúc₂)塵芥(góm')汁(ʃúr)筋(súdʒ')空(sóra)種(táně)足袋(táb')中(náka)孫(mágo)物(món)；馬鹿(báka)鉢(fáč')＝以上〈B型〉

○ò型～ 下(ʃtà)人(ftò₂)＝以上〈A型〉

穴(anà₂)雨(amě)板(ità₂)糸(itò)今(imà)草(ksà)雲(kmò)塩(ʃiwò)舌(ʃtà)杖(c·è)中(nakà)花(fanà)腹(farà)骨(foně)店(miʃè)物(monò)股(momò)夢(jumě)；馬場(babà)別(beči)＝以上〈B型〉

○○型～ 叔父(odʒi)金(kaně₂)紙(kami)川(kawa)国(kuni)首(kub')先(saki₂)鼻(fana)昼(fir)水(midz)樅(mom')＝以上〈A型〉

足(aʃi)何時(ic₃)糸(ito)笠(kasa)上(kami₂)草(ksa)雲(kmo)事(kot)綱(cna)時(tok')布(nono)腹(fara)窓(mado)物(mono, mon₂)；馬場(baba)別(beči)蜜(mic)＝以上〈B型〉

以上を、数字化して示すと、次の表のようである。（かっこ内は延語数）

資料 ＼ 現代鹿児島アクセント ＼ ゴンザのアクセント		A型[$\overline{○}$○]	B型[○$\overline{○}$]
『露日』	ó○型	73（98）	46（57）
	○ò型	14（14）	49（59）
	○○型	14（18）	21（24）
『会話』	ó○型	29（38）	13（14）
	○ò型	2（ 3）	20（22）
	○○型	11（13）	17（22）

これによれば、『露日』、『会話』ともに、ゴンザのó○型の単語は、現代鹿児島主流アクセントにおけるA型のものが多く、○ò型の単語は、B型のものが多いことに気づかれるのである。

特に、○ò型の単語は、『露日』においては78％（延語数では81％）、『会話』では91％（延語数では88％）のかなり高い割合で、現代鹿児島主流アクセントのB型に一致している。これは、偶然の結果とは考え難いであろう。

一方、ó○型の単語は、現代鹿児島主流アクセントと一致しないものが、かなり多いが、この例外となる単語の多くには、次のような共通した特徴が見られるのである。

≪ゴンザのアクセントで、ó○型でありながら、現代鹿児島主流アクセントでB型に属する単語の多くは、その第二音節に[i][u]の狭母音か、または撥音をもっている≫

このことから、直ちに想起されるのは、≪現代薩隅方言の自然な発音では、狭母音[i][u]を含む第二音節は、内破音化または撥音化し、独立性の乏しい音節となるために、B型アクセントが、本来の○$\overline{○}$型を保ち得ず、$\overline{○○}$型に実現する≫という事実である【注6】。ゴンザのアクセントも、この事実に関係があるのではないだろうか。村山氏や田尻氏によれば【注7】、ゴンザの場合は、語末の[i][u]の大部分は、まだ無声化の段階で、現代の

ように、内破音化、撥音化は起こっていないとのことであるが、母音の無声化がアクセントに影響を与えることがあるということも、よく知られている事実である。ゴンザの言語資料が、彼の自然な発音を記録したものであれば、現代鹿児島主流アクセントのように、$\overline{\text{○○}}$型であったか、九州北部地域や東北地方などに見られる$\overline{\text{○}}$○型に実現していた可能性は十分に考えられると思うのである。後者であれば言うまでもなく、また前者であったとしても、第二音節には母音字母が原則として現われないという事実からすれば、ó○型のアクセント表記になるのは自然である。

以上のようなことがもし言えるとすれば、ó○型 ～ B型という対応をなす単語の多くは例外と考える必要がなくなり、数字的には、『露日』では、異語数において95％（119例中113例）、延語数において同じく95％（155例中148例）、『会話』では、異語数86％（42例中36例）、延語数88％（52例中46例）のものが、現代鹿児島主流アクセントに矛盾しないことになる【注8】。

次に、ゴンザのアクセントの第三の型、即ち○○型について考えてみる。普通には、アクセント符号の付されていないものは、低平調（$\overline{\text{○○}}$型）に実現したものと考えたくなるところであるが、ここでは、次の二つの理由により、ゴンザの不注意その他何らかの原因で、たまたまアクセント符号が付されなかったものと考えておきたい。

(1)○○型の単語の多くは、別のところで、ó○型かまたは○ò型にアクセント表記されている。

(2)○○型の単語は、一類～五類の各類に分散して存在している。

従って、○○型の単語は、実際には、$\overline{\text{○○}}$型か○$\overline{\text{○}}$型であったと思われる。

以上をまとめると、ゴンザの言語資料における二音節名詞単独形のアクセントは、基本的に、≪ó○型＝$\overline{\text{○○}}$型，○ò型＝○$\overline{\text{○}}$型，○○型＝$\overline{\text{○}}$○型または○$\overline{\text{○}}$型≫であったと考えられる。そして、ó○型の単語の多くは、現代鹿児島主流アクセントのA型に一致し、○ò型の単語の多くは、B型に一致したのであるから、

≪ゴンザの時代の二音節名詞単独形のアクセントは、現代のそれと同じであった≫

と結論づけてよいと思われる。

次に、二音節名詞に助詞がついた形のアクセントを見てみよう。用例数の関係から、助詞は、「が」「は」「を」などの一音節のものに限ることにする。なお、これまでに得られた事実から、今後、次の方針に従うこととする。

(1)現代薩隅方言で独立性の乏しい音節となっているものは、ゴンザの資料でもアクセントを動かすことがわかったから、アクセント符号が付されている音節の次にそれが来ている場合には、○という表記を与えて音声環境を明示する。

(2)アクセント符号の付されていないものは、それだけでは型を決定できないから、一応考察の対象から外す。

(3)『露日』と『会話』は、上では別個に扱ったが、大体同じ傾向を示しており、今後もそれが予想されるので、以下一括して扱う。

さて、ゴンザの資料における〈二音節名詞＋一音節助詞〉のアクセントの実態は、次のようである。（▷は助詞の音節を示す）

ó○▷型 ～ 壁で（kábedze）金の（kánen）髭を（fígewo）紐と（fíboto）筆で（fúdzedze）＝＝以

上〈A型〉

Ó○▷型 ～ あれを(áiwo)石の(íʃno)内の(účno)俺が(óiga)俺を(óiwo)柿の(kák'no)国の(kún'no)それが(sóiga)それで(sóidze$_3$)それも(sóimo)それを(sóiwo$_2$)龍の(tá-cno)だれを(dáiwo)鳥の(tóino)どれも(dóimo)西の(níʃno)冬の(fúino)右の(míg'no)水の(mícno)道では(míčdza)虫が(músga)餅を(móčwo)＝＝以上〈A型〉

足の(áʃno$_2$)足では(áʃdza)網で(ámdze)犬は(ínna)海の(úm'no$_2$)膿と(úm'-to)膿の(úm'no)数が(kázga)神の(kám'no$_2$, kámno)上の(kám'no$_2$)絹の(kín-no)事が(kótga$_2$)露が(cúiga)時で(tók'dze)墨では(nóm'dza)蚤も(nóm'mo)原(fárdze)原では(fárdza)原の(fárno$_2$)蛇と(féb'to)麦を(múg'wo, múgwo)山羊の(jág'no)弓で(júmdze)脇の(wák'no)；本の(tónno$_2$)＝＝以上〈B型〉

Ó○Ó▷型 ～ 歌を(utáwo)壁で(kabédze)川が(kawága)国は(kuníwa)城は(ʃirówa)旗で(fatádze)鼻が(fanága)紐では(ʧibódza)豚の(btán$_4$)胸の(munén)＝＝以上〈A型〉

糸で(itódze)嘘が(usóka)嘘と(usóto)馬の(mmán)桶の(okén)肩が(katá-ga)肩では(katádza)鎌で(kǫmádze)鎌では(kamádza)皮で(kawádze$_2$)皮の(kawán)肝は(kimówa)草で(ksádz)月は(cukíwa)答を(togáwo)中の(na-kán)鍋で(nabédz)布では(nonódza)鍋で(nokódze)肌の(fadán)花を(fa-náwo)腹では(farádza)腹の(faráno)船で(fnédze)舟の(fnén$_2$)船を(f-néwo)前で(majédze)窓は(madówa)物の(monón)物を(monówo$_4$)；風呂で(furódze)＝＝以上〈B型〉

OO▷̀型 ～ 雲の(kmonò)霜が(ʃimoyà)月の(cuknò)＝＝以上〈B型〉

現代鹿児島主流アクセントでは、〈二音節名詞＋一音節助詞〉のアクセント型は、○○̄▷型（平山氏のA型）、○○▷̄型（同B型）の二種類しかない。ゴンザのアクセント型とこれを比較して表にすると、次のようである。（違った助詞のついたものは異語として扱う。かっこ内は延語数、空欄は用例のないもの。以下同じ。）

ゴンザのアクセント ＼ 現代鹿児島アクセント	A型[○○̄▷]	B型[○○▷̄]
① Ó○▷型	5（ 5）	
② Ó○▷型	22（25）	25（34）
③ Ó○Ó▷型	10（13）	31（36）
④ OO▷̀型		3（ 3）

これによれば、ゴンザのアクセントの型と、現代鹿児島主流アクセントの型との対応は、かなりこみ入っている状態である。そこで、手続きを簡単にするために、次のような仮定を設け、それに従ってゴンザのアクセントを再構してみよう。

《二音節名詞単独形の場合と同様、二種類のアクセントの型をもっていた》

まず、現代鹿児島主流アクセントでA型のものは、次のような型が考えられる。

(1) 上の表の②③から再構し得る○○̄▷型、即ち現代鹿児島主流アクセントと同じ型であり、①は例外（異語数14%、延語数12%）と見なされる。

(2) ①②から再構し得る○̄○▷型であり、③は例外（異語数27%、延語数30%）と見なされる。

(3)①②③から再構し得る○○▷型である。

以上は、安定した型を想定したものであるが、次のように考えることも一応可能である。

(4)①②から再構し得る○○▷型から、③の○○▷型（②③からの○○▷型も可能）へ移行する過程の姿を表わしている。

これらのうち、どの型の可能性が最も高いだろうか。例外の多寡という点では(3)ということになるが、アクセント表記が①と③に分かれる理由を十分に説明できないのが弱点である。その他では、(1)の可能性が高そうであるが、いずれにしても、型の決定までには至らない。

他方、現代鹿児島主流アクセントでB型のものは、②③から○○▷型を想定するのが最も妥当のようである。例外は④（異語数5%、延語数4%の割合）で非常に少ない。そうすると、ゴンザの時代の、B型所属のもののアクセントは、現代のものと違っていたことになる。

ここで、以上の推理の是非を、別の面から検証してみたい。それは、ゴンザのアクセントを現代鹿児島主流アクセントと比較せずに、その出自と推定されているアクセントと比較してみることである。金田一春彦、平山輝男、奥村三雄の各氏によれば、《鹿児島市を中心とする現代鹿児島主流アクセントやその他の九州西南部二型アクセントは、大分市を中心とする豊前・豊後アクセントから変化してできた》と推定されている【注9】。この仮説に従って、ゴンザのアクセントを検討してみよう。二音節名詞単独形のアクセントから見て、ゴンザのアクセントは豊前・豊後アクセント以降のものと考えられそうであるから、それぞれのアクセントの系統は、

豊前・豊後アクセント⟶ゴンザのアクセント⟶現代鹿児島主流アクセント

という順になる。これを、具体的なアクセント型に直して図示すると、次のようである。（ゴンザのアクセントは、安定した形を想定した。）

アクセント名／類	豊前・豊後	ゴンザ	鹿児島
一・二	○○▷	○○▷？ ○○▷？ ○○▷？	○○▷
三	○○▷	○○▷？	○○▷
四・五	○○▷		

これによれば、まずB型（三・四・五類）を○○▷型と推定したことには、全く無理がないと思われる。豊前・豊後アクセントの四・五類のものが、アクセントの山を一つ後送りしたと考えればよいのだから。さらには、前記金田一・奥村両氏ともに、現代鹿児島主流アクセントのB型のものは、一時代前は○○▷型であったと推定しておられるのである【注10】。

一方、A型のものは、豊前・豊後式の○○▷型からは、○○▷型にも○○▷型にも、さらには、恐らく前二者のいずれかを経て○○▷型にも移行することが可能である。従って、これによっても、A型の具体的なアクセントの型は決定し得ないという結果になった。

以上、ゴンザの言語資料における、二音節名詞のアクセントを、単独形、助詞接続形について検討してみた。上の結果に見る通り、助詞接続形の場合は問題が残ったが、これは、三音節語のアクセントに準じて考え得るから、それらの検討によって、もう少し確実な発言ができるかもしれない【注11】。

なお、途中いくつかの仮説の上に論を進めたが、これまでのところ、大きな不都合はなかったものと思う。

【注1】前節、前々節ですでにアクセント符号を出しているが、左下がりのアクセント符号は、語頭・語中または文節の頭、文節の中に打たれる場合で、右下がりのアクセント符号は、語末または文節末に打たれる場合を示す。従って、両者に内容的な差異はない。

【注2】○は高く発音される音節、●は低く発音される音節を示す。

【注3】『九州方言音調の研究』(学界之指針社, 1951)参照。

【注4】現代共通語形は"イガ"であるが、同語源の転訛形と考えられるのでそのまま採用した。「魚」「蛙」なども同様である。

【注5】数字は2例以上ある場合の用例数を示す。

【注6】【注3】に同じ。

【注7】村山氏『薩摩流民の言語』、田尻氏一はじめに一の【注1】論文参照。

【注8】とすれば、例外はむしろ○●型のものに多いことになるが、この○●型～A型という例外となる単語もまた、共通した特徴をもつものが多いのである。即ち、第一音節が〈無声子音＋狭母音〉というのがそれである。音声学の教えるところでは、無声子音や狭母音は、有声子音や広母音にくらべて、「きこえ(sonority)」が小さい(『音声学大辞典』(三修社, 1976)による)。従って、実際には○○型であっても、ゴンザが第二音節を強く認識した可能性があると思われる。

【注9】金田一春彦「語調変化の法則の探求」(東洋語研究3, 1947)、同「対馬付近及のアクセントの地位」(『対馬の自然と文化』1954)など、平山輝男『日本語音調の研究』(明治書院, 1957) 175ページなど、奥村三雄「九州諸方言アクセントの系譜」(九州文化史研究所紀要23, 1978)など。

【注10】【注9】に同じ。

【注11】三音節語その他のアクセントは(下)で検討する予定である。なお、ゴンザのアクセントの音韻論的な解釈も(下)でまとめて行ないたいと思う。

一宮崎大学講師一